



触手ぱにつく！ おためし版

意馬心猿

女神は踊る

【登場人物】

主人公…ニーア

人間族。茶髪、茶色い瞳。可愛らしい明るい穏やかな女の子。

一人称、私

お相手…バルガ

ガチの獣型、狼獣人。全体の黄金色の毛色の中心縦に灰色の毛色、灰色の尻尾。灰色の瞳。背が高く大きい。

一人称、僕

*

その日、私は入りたての商人組合の研修期間の一つとして世界各地にある地下洞、不可道、迷宮の一つ、総称「ダンジョン」の核が一団隊の護兵の手によって取られて間もないダンジョンへと潜る事となった。

『春の獣人には近づくもんじゃない』

そんな言葉を耳にした事がある。その根拠たるものはなんなのか現在、斜め前を先導して歩く獣人に目が向く。

狼、犬？

獣人といつても種類は多々あるとは聞いたが狼系と犬系は違うらしく聞く時に慎重にならなければ気分を害させる事があるらしい。

「……」

パンを上手く焼けた時の黄金色に似ている全身の毛色と頭の天辺から背中に向かって生える灰色の毛。腰の辺りから下げられている灰色の尻尾。それが、ふりふりと薄暗い洞窟の中で揺れている。

正直、どちらかわからない。

とはいって別段どちらであろうと彼が良い人だという事は、ひしひしと感じるので嫌われる事にならなければ、どちらでも良い。

彼が手首の両腕輪に着ける魔法石の淡い光が洞窟を照らす光を強くする。彼の魔力の調節次第で光の調度が変わるようだ。

「ニーアちゃん」

「はい、バルガ先輩……！」

声をかけられ慌てて顔を上げて彼を見上げる。獣人の彼は背が高いし大きい。見下げられると少し緊張した。

「この上階、三階までは完全に掃除されていて魔物は出ないけれど次の四階からは少しづつ出てくると思うから気をつけてね」

「は、はい！」

「まあ、そんな強い敵じゃないし物理だけで、どうとでもなるだろうけど何事

も命が懸かっていると思つて、どうか慎重に」

「りよ、了解です！ バルガ先輩！」

「うん、良い返事」

ニカツと笑う獣独特の大きな口が、なんとも可愛いなつと四階に下りながら気を緩めてしまう私がいて駄目だと思ひ両手で自分の頬を大きく叩くと彼、バルガ先輩が目を真ん丸に見開いて振り向き私を見る。

「……気合いをいれました」

自分の最大限の真面目な顔でそう言えばバルガ先輩の目元が細く緩み喉を鳴らす。

「可愛いなあ」

「へ」

今度は私が見開いて驚く番だったがバルガ先輩はそれだけ言うと前に顔を向き直し私を先導していく。

少し、頬の痛み以外にも頬が朱くなっているような気がした。

——……宝箱だ……！

深く暗い穴の奥には蔓にぐるぐると巻かれた小さな宝箱が一つ。ネボルより一回り小さい大きさだろうか。しゃがんだ体制のまま腕を伸ばした状態でバルガ先輩に顔を向けて声をかける。

「先輩！ バルガ先輩！ 奥！ 奥に宝箱がありますよ！」

「え……？」

今だ悩んでいる様子だった彼は顔を上げ。私に目を向けると驚いた顔で身を

起こす。反射的に動き出したバルガ先輩を見て彼も宝箱に心躍っているのだと思つた。

「凄いですね！ ダンジョンって本当に宝箱が……」

興奮気味にそこまで言つて身体が、がくりと均衡を無くす。

「!?」

わけもわからず動かなくなつた両腕。否、動きにくくなつた両腕に目を向ける。倒れた身体は自分の意志とは関係なく穴奥へ向かつていく。宝箱に巻き付いていたであろう蔓が何故か私の両腕に巻き付いていて。私を奥に引きずり込んでいく。

「へ、うそ、や」

「ニアア！」

バルガ先輩が私の名前を呼び、まだ穴に入っていない胸元から私を抱くように掴み引つ張る。

「ひ、う、わ」

痛い。

腕に巻き付く蔓はどんと増え、私の二の腕まで巻き付き始めている。

「プラントか！ くそ……なんで五階に……」

焦ったバルガ先輩の声に頭が真っ白くなる。

罪悪感や謝罪が身の内を駆け回り、プラントの強い力に恐怖が、ただただ膨れ上がる。

【プラント】

名前は凶鑑で見た事がある。触手を使って獲物を捕まえる植物型の魔物の総称だ。それには色々と種類があるらしいが大抵は植物系の階層に産まれる魔物で、この石ばかりの階層に産まれるというのは滅多にない。あるとすれば別階層から他の魔物に寄生して、その種を持った魔物が別の階層で上手く床となり安全に成長する事ができた場合のみ。

プラントは完全に成長してしまえば強いが、その成長過程を邪魔されると非常に脆く弱い。

そしてこれは。

「うっ」

頬に触手が当たる。鈍い緑の表面と内側の鈍い小豆色の面が無情にも自分の灯した明かりでよく見える。

一度視覚にとどめてしまえば全貌が、ありありと見えてくる。

奥の空間に広がるプラントの塊。

安全に成長しきったプラント。

鈍い緑色の皮をもった鈍い小豆色の植物の蔓に似たそれは内側程生々しい色合いで全体的にヌメヌメとした液体を垂らしている。

私の腕も液体でヌルヌルだ。

ずるずるずる。

—

側に戻ってきた彼の耳はぴんつと立っていて心なしか毛が逆立っている様に見える。

ぱたんっ。

ぱたんっ。

彼の尻尾は一定の間隔で揺れている。

「……ニアちゃん」

「あ……………い……………」

バルガ先輩が私を布板に置いてから触手に巻き付かれて取れていない拘束の感覚が妙に気になつて動くと腹元の方は取れていくが腕の方は絡まりが強くなつた様な気がしていた。絡まったのだろうか。ずるずると身体の周りの触手の残骸を感じて体中のぴりぴりした感覚が甘く感じる。

……………きもちいよお……………

腹元の触手の残骸を無言でバルガ先輩が引き抜いてくれた。

「あ、は……………」

思わず漏れる声。涎が垂れる。

「……………」

私の腰元に跨るようにして触手の残骸を取ったバルガ先輩の動く尻尾が私の

服上から触れて直接肌に触れているわけではないのに身がくすぐったいような、ぞくぞくとした感覚をもたらしした。

ひゅーひゅーつと息が漏れる合間に、ぱしりっぱしりつと尻尾が当たると身の内から勝手に声が漏れる。

「ひゃ、あ、あ……♡」

「……すごいにおいだ」

私の頭を間にして両手を置いたバルガ先輩が身を屈め犬のような彼の鼻先が私のベトベトに濡れた頭に触れた。

「知ってるかな……ニアちゃん」

「ん……う……」

「寄生型のプラントの液体は度数の高いお酒と似ていてね……」

鼻先を私に付けて、ヒクヒクさせる彼のわずかな動きが私の身を震わせる。「匂いだけでも僕らの思考を惑わすんだ」

額に彼の鼻先が触れ、ぐにぐにと私の顔の皮膚を押しながら乱れた髪の間に入り込む。もともと、それほど長くはないが肩少し下まで伸びる髪を結んでいた紐は一連の間に無くなってしまったらしい。

「……酒のような刺激臭。それに……君の吐いたモノ。凄い臭いだよ」

まっば☆褐色エルフ♂

【登場人物】

ヒロイン…タリカ♀

肩までかかる栗色の髪、淡い灰色の瞳。

探求心が強い。

一人称、私。

ヒーロー…クロード♂

褐色エルフ、熊の獣人との混血、短めの銀髪、金色の瞳。

正義感はあるが孤独に生きていた。

一人称、俺。

王都市隣から三つ離れた中型規模街、【シャトルバ街】の中心部に【ギルド】はある。大きな建物の総称ギルド内には商人組合と冒険組合と二つの組織があり。冒険組合は討伐や依頼を出したり受けたりとする場所で、商人組合は素材を下ろしたり鑑定して買い取ったり細々とした道具類を売っていたりしている。

「これ、何時もの回復薬類ですわ」

タリカはギルドと契約している有能な錬金術師であり幼い頃からの貢献度は

高く国規模では星七という位を手に入れている。最上級は星十と言われる中で七は優秀な存在といえるだろう。

「ありがとうございます。あ、この新しく売ってくださった携帯食料型で体力回復してくださるこちらの、手軽で美味しいと評判ですよ！三日で完売しちゃいました」

女神の踊りの季節が過ぎた春頃から商人組合の受付をしている新人のニーアに褒められてタリカ少し照れながら頷いた。

「嬉しいです。妹と出来るだけ美味しい体力回復薬をと考えて頑張ったかいがありましたね。次はもう少し多目に用意したいと思いますわ」

「リリカさんと！お二人は仲良し姉妹さんで素敵ですね！」

「はい仲良しさんですよ！」

ニーアは妹のリリカを含めて素直に褒めてくれるのでタリカのお気に入りのお気入りのお受付嬢だ。星二の魔法使いの妹は、よくタリカと比べられるので手放しで褒め

てくれる存在は心から、ありがたかった。

「じゃあ、その携帯回復薬を作る為の素材を取りに森に入ろうと思うのですが何か、ついでに欲しい素材とか、ありますか？」

「ん！ タリカさんは熱心ですね！ そんなタリカさんに朗報です。ここに冒険組合に渡す前の薬草の依頼書が……」

「ふふふ良いモノをお持ちで……」

「えへへ」

「んふふ」

二人で少し小芝居をして反対側面にある冒険組合に列ばずともニーアが手続きを済ませてくれたので、そのままタリカは森へと向かう。持つべき友が受付嬢だと仕事もスムーズだ。冒険組合は時間帯によっては酷く混むので、この配慮は非常にありがたかった。

タリカの眼前先にはプラントが一部を燃やして失っているが、家一つ分の面積量で繁殖している姿に歓喜する。

「ここまでの規模は初めて……素晴らしいわね……しかも種類が幾つか違う？
新種……？」

落ちている千切れた蔓を一つ手にして観察していると声が聞こえるのに気が付いてタリカは顔を上げた。見ればプラントの触手に埋もれているが褐色の人の腕や脚がありアレが蹂躪されているエルフと予測出来た。

「まだ生きているみたいね。良かった」

タリカは辺りを見渡すと袋から紙の束を取り出し口を塞ぐ布下に入れて数枚を口に含み舌上で溶かし自分の体内に摂取する。それはタリカが作り出した携

帯しやすい魔力増加の薬だった。

「……全てに既存する親愛なる生命よ、その身を踊らせ、凍える地を我に与えたまえ」

タリカが呪文を唱えると辺り一面の空気が急激に冷え込み自身の液体で濡れたプラントが次々と動きを鈍くしていく。タリカはプラントに近付き落ちていた剣を拾うと振りかざし適当に蔓をなぎ払っていく。動いてはいるが触手の動きは非常に鈍くタリカの拙い剣さばきでも余裕で薙ぎ払えた。その際に気になったプラントの一部は瓶に採取していく。

「中心部のが株なのに伸ばす過程で種類が変わるなんて……不思議ね……」
興味深そうにエルフ男を巻き付けて離さない蔦を切りながら呟くタリカ。その間、エルフ男はくぐもった声を漏らしている。

「あら……種付けされてるみたい」

エルフの太股までプラントを捌けば脱げた防具や服が下に落ちており産まれ

たままの姿のエルフの尻穴には凍えて動きの鈍くなったプラントの触手が入り込んでいた。前も蔓に包まれているが、そちらとこちらとでは触手の動きが違う。種を植え付けた尻穴を守りたいのかタリカが切ろうとすると、触手総動員で守ってくる。

続きは本編で！

触手ばにつく! おためし版

発行日 2021年5月27日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
